
07 花火

古縁空白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

07 花火

【Nコード】

N6815V

【作者名】

古緑空白

【あらすじ】

思い出せば、もう少しの努力で 今とは違った未来を歩めたかもしれない。その事に後悔はなく、進むために少し戻る。

その手紙は元恋人から送られてきたものだった。

茶封筒に鳥の切手。小奇麗で見やすい文字は彼女のものだ。住所は見覚えがなく、新しく越したところなのだろう。X県となり、隣の県だった。

「だれから？」

娘の問いかけに私は少々窮した。娘はまだ幼少でありのままに伝えるのは機嫌を悪くしそうなので、私は「知り合い」とだけ言って彼女に応えた。娘はふーんとだけこぼし、すぐに絵本を読むのを再開し始めた。

私にとって幸いだったのは妻がその時不在だったことだ。もう一人の子供を身ごもっているというのに、出来るだけ自分で行動したいというので一人で買物にいられた。彼女にこの事を詮索されるのは私としても気分は良くない。

そう言う意味でこの手紙は懐古を味わうというよりも、冷や汗をかきような意味合いの強いものだった。

手紙を見て見ると、隣の県で今週末に花火大会をやるということだった。それを一緒に見に行こうと誘いの手紙であった。

私はそこまで読んで断ろうと思った。彼女とのよりを戻すほどの恋心はもうないし、昔のように厚顔無恥ではいられない。第一家族に悪いと思ったからだ。

だが、私は行くことにした。

大事な話がある、と書かれていたからだ。

何度も手紙を読み返して気付いたことがある。簡潔に過ぎるのだ。花火の詳細と日時、待ち合わせの場所、そして、大事な話という言葉。

久しぶりに会う知り合いなのだ、もう少し言葉を彩った方が自然なのにこの手紙から感じられるのは『焦慮』だった。

彼女が何に焦っているかはわからないが、深刻であることは確かだろう。

その日のうちに私は今週末に昔の知り合いという名目で花火大会に行くことを妻に告げた。妻は一緒に行きたいと言ったが、表面的なもので深くは追及してはこなかった。

そして週末、私はラフな格好で待ち合わせの場所についた。時計を見ると時間の三十分前だった。

それを見て、なんとなく彼女と付き合っていた頃の自分を思い出す。

その頃の私はとてもルーズな性格で待ち合わせに遅れることはしよつちゆうだった。彼女と別れることになったきっかけもそこにある。今思い返してみるとすごく悪い事をしたと思う。でもそれは昔ほど熱を含んだものではない。

空を見る。絶好の、とは言い難いがそれでも夜空に映える花火になりそうではあった。

と思っていると、後ろから誰かに呼ばれた。

元恋人であった。

久しぶり、元気にしてた？ というのが彼女のあいさつだった。

私は振り返ってとっさに、君は元気じゃなさそうだね、と返してしまった。

声は変わって無かった、いや、本当は少し変わっていた。それが生活の所為であるのかと少し思った。そして、よく顔を見るとやつれていて、よく言えばふくよかだった彼女の面差しは陰のある病弱的なものに変わったことに私は驚いた。

どうしたの？ 私は体調の意味合いで聞いたのだが、彼女は今日呼び出したことだと思ったのだろう。相変わらず、私たちはすれ違えばなしかった。

彼女はまだ言えない、とだけ言った。

そうして人混みの中へとかけ行つた。

話題はお互いの結婚の話となつた。驚いたことに、彼女も結婚していたそうだ。相手は私の知らない相手だった。そして、私も彼女の知らない相手と結婚していた事を告げる。彼女の方は何故か知っていたようであつた。それは私たちの結婚式に参加した、彼女とも私とも知り合いの友人が教えたからだという。住所もそいつから聞いたのだそうだ。

年をとつたねえ、誰からともなくそう言う話題になる。彼女は持つてきたビールを開け、私にすすめるが私は今日は車で来たということ誘いを断つた。

昔話に花が咲き、花火が上がるまではその話題を徹していた。

花火は轟音とともに夜空に散つた。

それとともに、彼女は言う。

「私、もうすぐ死ぬんだ」

花火の間隙を縫うように彼女は言った。そして、また一花散る。ガンだという。私はそれなのにビール飲んでいいのかと尋ねた。

彼女は笑っていいわけないよ、と返した。

「最後に、君と花火を見たかつた」

そう言つて、私は思い出した。彼女と別れることになつた事件を。その日も今日のように花火大会があつた。だが、私は急なバイトがあつて彼女と見ることが出来なかつた。当時は携帯電話がそれほど普及していなかつた。だが、私は家電にも電話をかけなかつた。

思い出した？ 彼女は尋ねる。私は肯き、少々ばつの悪い顔になつた。悪いのは明らかに私だったからだ。

それから花火大会が終わり、酔い潰れた彼女を家まで送つた。彼女の旦那に会う事がなかつたのが幸運だつた。

そして、ほどなくして彼女の訃報が訪れた。送つてきたのは当然彼女の旦那だつた。

けれども、私は行かなかつた。

今の家庭があるし、彼女とはもう縁がない。

その事をつい妻にこぼしてしまった。酒の席でだ。彼女は怒るでもなく行ってきたら、といった。

しこりが残る、妻はそうこぼした。この先も彼女の事を思い出す事が、貴方の幸せには繋がらないと。

「別れてきなさい」

妻はニツカリと笑い、私にそうすすめた。

そして、私は喪服を着ることにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6815v/>

07 花火

2011年8月11日03時38分発行